

学び直し・テーマ「日本の古代史」

はじめに

私（筆者）が、学び直しの最初の取り組みテーマとして「日本の古代史」を掲げたのは、日本人として「自分の国の歴史、国の始まり」を知っていて当然の思いからだ。この歳（八十過ぎ）になって知らないのはとても恥ずかしい。外国の人から聞かれたら、大学生や高校生になる自分の孫たちに聞かれたらどうしよう、などの思いからでもある。

何十年も前の自分の大学受験を思い出す。現代国語、英語、世界史で受験した。日本史より少しは世界の歴史を知っている。なおさら恥ずかしい思いがする。しかも高校は工業高校で、工学系の専門科目が多く歴史は素通り、私の小学・中学での歴史教育は戦前の皇国史観から、新しい歴史教育へ移行するさなかにあった。歴史教育に力を注ぐ環境でもなかった。従って私には本格的に歴史を学んだという記憶がない。日本の歴史を何も語る事が出来ない。従って、冒頭の「学び直し」というより、初めから学ぶということになる。（大野）

日本の古代史・目次

第一章 「教科書の古代史」……わがクニの始まり

日本の先史・古代史が熱い。考古学などの研究成果を受けて、古代のイメージが大きく変容している。かつて学校で習った知識は古びて、いまや通用しない。

第二章 「古代史の論争」……東大と京大の学派

日本の古代史で史学会や考古学会の論争点は、魏志倭人伝に伝えられる倭人⇨卑弥呼の倭国⇨邪馬台国は何処にあったか……この論争は古くは、江戸時代、さらに明治から大正時代には京大と東大が、大和か九州か、で論争になっていた。

第三章 「古代史の論争」……国や地方の研究機関の傾向

研究機関の専門研究員の学説も九州か大和かに。……「樞原考古学研究所」は「纏向遺跡」の発掘する機関だが、研究員の調査論文も、九州説と大和説に分かれている。

第四章 「古代史の論争」……このテーマの私の卒論

私なりのこのテーマの「卒論」を書きたい。先達の先生・研究者の学説・論説に対して、「なるほど」と感じるところ、「どうなの」と疑問に思うところ、そして「私ならこう考える」ところ、そこから自分の考えを導きだしたい。（大野）

第一章 「教科書の古代史」…わがクニの始まり

■歴博（れきはく）の子供向け古代史

我が国の初等教育（義務教育の小学校・中学校）で、今現在（二〇二四年）、日本の歴史をどのように教えているか、そこから知りたくなった。恥ずかしい話だが、元の図書館には「教科書」がないことも今回で知った。いまさら教科書を購入するのも考えものだし、ネットで色々調べてみた。国立歴史民俗博物館の出版物に「わくわく探検 れきはく日本の歴史 一先史・古代」（吉川弘文堂）があることがわかった。

刊行のことばとして…

みなさんは国立歴史民俗博物館を知っていますか。「れきはく」という愛称で知られる私たちの博物館は、日本でたった一つしかない、先史・古代から現代までの日本の歴史と文化について展示している博物館です。今回、れきはくの展示物や資料を使って、みなさん自身で日本の歴史を探検できるような「紙上博物館」をつくりました…と述べている。

さらに巻末（裏表紙）には、内容に触れて…

日本列島には、いつ人類が住み始めたのかな？ 水田稲作は人々の生活をどのように変えたのかな？ なぜ巨大な古墳がつけられたのかな？ 日本が国家としてまとまるまでの三万年以上にわたる歴史をたどってみよう！（文中のふりがな省略）…

と、小学生を対象にしているような表現で語りかけている。ここで述べられている内容は、現在の初等教育の教科書の内容とほぼ同じと考えて良いだろう。

この「日本の歴史 一先史・古代」は、企画・統括から本巻編集、それぞれのテーマの執筆者まで、すべてが国立歴史民俗博物館の研究部の史学（注…文献学）・考古学の教授・准教授が担当している（大学・大学院の教授クラス）。掲載内容で「歴博」としての考え、傾向は知ることができると。

特に、現在の史学・考古学の争点になっている、邪馬台国は畿内（大和）か、北部九州か、卑弥呼・台与とヤマト政権との関係など、注目すべきだろう。

ここでは、弥生時代の「卑弥呼と邪馬台国」から古墳時代の「ヤマト王権」までの「倭の国々クニ」として、まとまりはじめの段階に、関する記述を取り上げてみた。

● 四章 「倭の登場」 (二三三頁)

古い中国の書物(注:魏志倭人伝)には、弥生時代の人たち―倭人―が中国に来たとの記録があります。このころの日本列島では、九州北部や日本海沿岸、今の近畿や関東ぐらゐのひろがり、人々のつながりが見えはじめます。

地域を代表した王も登場してきます。中国や朝鮮半島の交流は、日本列島の各地の様子を変えていきました。

● コラム四 「倭王への道」 (四二頁)

弥生時代の後半に各地の結びつきが強くなり、やがて一人の王の下につながるしくみをつくりだしました。倭王の誕生です。日本列島の各地では、同じお墓のかたち、同じくらしぶりが見えるようになりました。

倭王のお墓のは二〇メートルをこえる巨大な前方後円墳です。各地の王は、倭王と同じ形のお墓を作るようになります。王がもつ鏡や鉄の剣、玉などは倭王とのつながりを表す品でした。…また、より遠くへと移動する

動きが活発になりました。

● 五章 「倭の前方後円墳と東アジア」 (四四頁)

日本列島の各地に現れた大小の王たちや女王たちが、大和(いまの奈良県)にいた一人の強力な王(倭王)を代表としてまとまり、政治のしくみを作っていた時代が古墳時代です。古墳の大きさや形には、そこにねむる王の格式や勢力が映し出されました。

古墳時代を通じて、もっとも大きな前方後円墳を築いたのは、近畿地方の中央部にいた倭王です。倭王と手を結んだ各地の王はそのしるしとして、倭王と同じ前方後円墳を、地位や力に応じて様々な規模で築きました。本体を四角くした前方後方墳をつくって独自の立場を示した王もいます。

円墳や方墳は、王たちよりも下の有力者が築いたものですが、地域によっては、王クラスの規模になることもあります。このような、古墳の規模と形によってお互いの身分を認め合うしくみによって、倭王権は成り立っていました。

●コラム五「アジアのなかの古墳時代」(五八頁)

日本列島に古墳が築かれた三世紀から六世紀のあいだには、朝鮮半島やその周辺でも、王や有力者の墓を大きく築くことが流行しました。倭王権は、日本列島だけでなく、アジア諸地域との密接な交流のなかから生み出され、古代の国家に向けて発展したのです。

このように、次に述べる「高校の教科書」が、我が国の古代史の問題点を指摘しているのに比較して、中学や小学校の教科書では詳しくは述べられていない。中国の歴史書に出てくる「邪馬台国や卑弥呼」、「邪馬台国とヤマト王権」などには触れられず、：

：日本列島の各地に現れた大小の王たちや女王たちが、大和(いまの奈良県)にいた一人の強力な王(倭王)を代表としてまとめ、政治のしくみを作っていた時代が古墳時代です。古墳の大きさや形には、そこにねむる王の格式や勢力が映し出されました。：

：古墳時代を通じて、もっとも大きな前方後円墳を築いたのは、近畿地方の中央部にいた倭王です。倭王と手を結んだ各地の王はそのしるしとして、倭王と同じ前方

後円墳を、地位や力にに応じて様々な規模で築きました。本体を四角くした前方後方墳をつくって独自の立場を示した王もいます。このような、古墳の規模と形によってお互いの身分を認め合うしくみによって、倭王権は成り立っていました。：

：と近畿のヤマト王権の存在と特徴的な古墳⇨前方後円墳のみを記述している。小学・中学レベルでは、当然ながら、結論の出していない論争点については触れない、ということになる。しかし、「大和の強力な王(倭王)」「近畿地方の中央部にいた倭王」と述べていることは、歴博の先生の考えが、大和説にあるといえる(後述)。

私自身の小学校・中学校の授業ではどうだったのか。恥ずかしながら歴史に関しては全く記憶にない。私は昭和十七年(西暦一九四二年)生れ、小学校は(多分)昭和二三年入学かな(北区滝野川小学校、三年次に文京区林町小学校に転校)。歴史の授業が六年生にあつたとすれば昭和二十九年頃となる。戦後の混乱(戦前・戦中の皇国史観からの脱皮)した歴史教育が新しい価値観で描かれる過程の時代といえる。もし私が授業で聞いたとすれば、ここで書かれている内容とあまり変わらないはずだ。

(大野)

■高校の日本史の教科書の「古代史」

ネットを調べた結果、高校の教科書に関する記述で私(筆者)の興味を引いたのが、「デューク西郷」氏の「邪馬台国の所在地についての教科書の記述」(二〇二二・一〇・四)である。高校教科書として次の三つをあげている。

山川出版社『詳説日本史』(二〇一六年検定)

東京書籍『新選日本史B』(二〇一六年検定)

清水書院『高等学校日本史B』(二〇一六年検定)

：現在、高校で使用されている日本史の教科書をいくつか調べてみました。調べた中では、下記の教科書において、邪馬台国の場所はまだ判明していないが、畿内説が有力になっていることを示唆する記述になっています。なお、教科書のシェアとしては、三つで七五%くらいを占めます。：

：学習指導要領が変更されて、来年(二〇二三年)四月からは高校の授業で「日本史探究」という科目が新設され、日本史の教科書も改訂されるようです。新しい教科書で邪馬台国の所在地がどのように記述されているか注目したいと思います。(西郷)。：

●山川出版社『日本史探究 詳説日本史』(二二年検定)

邪馬台国の所在地については、これを近畿地方の大和に求める説と、九州北部に求める説とがある。近畿説をとれば、すでに三世紀前半には近畿中央部から九州北部におよぶ広域の政治連合が成立したことになり、のちに成立するヤマト政権につながることになる。

一方、九州説をとれば、邪馬台国連合は九州北部を中心とする比較的小範囲のもので、ヤマト政権はそれとは別に東方で形成され、九州の邪馬台国連合を統合したが、あるいは邪馬台国の勢力が東遷してヤマト政権を形成したということになる。

※奈良県桜井市の纏向遺跡は一九七〇年代から発掘調査され、三、四世紀の一〇〇ヘクタールにおよぶ大集落であることがわかった。二〇〇九(平成二一)年に整然と配置された三世紀前半期の大型建物跡が発見され、のちのヤマト政権の王宮につながるものとして注目されている。

●清水書院『高等学校 日本史探究』(二二年検定)

邪馬台国は、三世紀に中国で編まれた歴史書「三国志」

のうち、いわゆる「魏志倭人伝」に登場する。(中略)邪馬台国の所在地については、近畿地方(畿内)とする説と、九州地方とする説を中心に、活発な論争が展開されている。

一方、「魏志倭人伝」は、魏の立場で編纂された史料であるため、一定の限界もある。そこで考古資料が注目される。倭の女王(卑弥呼)が魏から銅鏡一〇〇枚を授けられたことがみえる。それに該当する可能性があるのが、前期古墳に副葬された三角縁神獸鏡である。

また、二四七年前後に卑弥呼が死去し、直径一〇〇歩あまりの塚をつくったことがみえる。その有力候補に、奈良県桜井市の三輪山の麓に立地する箸墓古墳がある。

さらに、箸墓古墳に隣接する纏向遺跡では、三世紀の巨大集落跡がみつきり、都市とみる意見もある。この遺跡では、列島各地の土器が大量に出土し、巨大な運河などの土木事業の痕跡も確認された。東西の軸線には整然と配置された建物群があり、「宮室」の一部だとする見方もある。

従来の教科書との比較では、山川出版社の教科書は、纏向遺跡についての説明が詳しくなり、畿内説がより強まっていることを示唆しています。正直なところ、最新

の研究成果を反映して、もう少し踏み込んだ内容にして欲しかったのですが。：

：清水書院の教科書では、考古資料から畿内説でほぼ決まったかのような印象を受けます。しかし銅鏡一〇〇枚に該当する可能性のある鏡として、三角縁神獸鏡に絞ってしまっているのは勇み足ではないかと個人的には思っています。ここは漢鏡五期〜七期の鏡も候補に入れておくべきだと思います(西郷)。

私から見れば、一六年検定の教科書と、二二年検定の教科書の論争点の記述は、詳しくなったとはいえさほど変わってはいない。先端の史学・考古学でこの間の進展がなかったことを物語っている。

内容的に、邪馬台国の所在地について、近畿地方の大和説と、九州北部説とがある、と論争点を明確にしている。さらに、近畿のヤマト政権と、九州の邪馬台国連合が別々に存在していた。のちにヤマト政権が九州邪馬台国連合を統合したとする説、邪馬台国の勢力が東遷してヤマト政権を形成したとする説とがある、と論争点を明確にしている。(大野)。

■ 社会人向けの日本史教科書

：『もういちど読みとおす山川新日本史』という本が先日出版されましたので読んでみました。この本は高校の教科書『新日本史』（山川出版社）をベースに書かれた「社会人向けの日本史教科書」という位置付けです。また執筆者も高校の教科書『新日本史』と同じです。この本では邪馬台国の所在地について以下のように記述されていました（西郷）。：

■ 山川出版社『もういちど読みとおす山川新日本史』

（二〇二二年）

邪馬台国の所在地には、大和を考える近畿説と、九州北部を想定する説とがある。近畿説をとれば、三世紀には近畿から九州北部におよぶ広域の政治連合がすでに成立していたことになり、九州北部説をとれば邪馬台国連合は九州北部を中心とする地域政権で、日本列島の統一はさらに遅れることになる。

所在地については容易に結論は出ないが、古墳が成立する時期を三世紀とする研究が進む中で、「ヤマト」を中心とするヤマト政権に邪馬台国連合が直接つながる可能

性が高くなった。

邪馬台国の中心部とされる候補地の一つに、纏向遺跡がある。この遺跡は奈良盆地の東南、三輪山のふもとに位置し、大量の土器が出土し、大型建物跡も発見されている。巨大な運河などの土木工事がおこなわれた大規模な集落であり、政治の中心的地域だったと考えられる。この地には帆立貝型の独特な古墳がみられる。

これは前方後円墳に先行し、山陰地方の四隅突出型墳丘墓、吉備地方の楯築墳丘墓（岡山県倉敷市）などの弥生時代後期の大型墳丘墓や、吉備地方中心に墳丘に立てられる特殊壺・特殊器台など、各地の文化の特徴を継承している。

「山川新日本史」の著者は、大津 透氏で、東京大学大学院人文社会系研究科の日本史学講座の教授である。考古学ではなく古代の文献史学が専門。ここで詳しく解説するより、次の「大学の日本史」、さらに次の二章の「古代史の論争」：京大学派と東大学派、で触れていくことにする。（大野）

■大学の「日本史古代」の教材・参考書

高校の教科書には国・文部科学省の「検定」があるが、大学の教科書（？）、正確には大学の授業で使う教材・参考書は、自分の研究に則した内容のものになる。つまり大学や担当教授によって内容が千差万別となる。

ネットで調べてみたら、歴史の専門書が多い「山川出版社」に「大学の日本史：教養から考える日本史 ①古代」（本格的に歴史を学びたい人向けの日本史教科書）を見つけて購入した。

「はじめに」に放送大学の印刷教材「日本の古代」（二〇〇五年）に新稿・改稿の手を加えて新たに再構成した、とある。この本書は二〇一六年二月第一版である。

この「：日本史 ①古代」の内容は

- I部 原始から大和政権へ
- II部 律令国家
- III部 平安王朝
- IV部 撰関時代から院政へ

と大枠で区分され、古代史で問題視されている論点は、

「I部 原始から大和政権へ」の「3章 倭王権の成立」でほぼ言い尽くされている。この章の内容を引用して、論点を指摘しておきたい。

この本でさらに指摘しておかなければならないのは、編集と執筆者である。

編者は、「佐藤 信（さとう まこと）」一九五二年生れ、東京大学大学院人文科学研究所国史学博士課程中退、現在（二〇一六年）東京大学大学院人文科学系研究科教授、とある（注：現在は名誉教授）。

さらに、論点となる「3章 倭王権の成立」の執筆者は、「倉本 一宏（くらもと かずひろ）」一九五八年生れ、東京大学大学院人文科学研究所国史学博士課程単位修得退学、現在（二〇一六年）国際日本文化研究センター教授、とある。

もう一人の執筆者の「佐々木 恵介（ささき けいすけ）」一九五六年生れ、東京大学大学院人文科学研究所国史学博士課程単位修得退学、現在（二〇一六年）聖心女子大文学部教授、とある。

出版社編集部在意図か、執筆側の編者の意図かわからないが、完全に東大系の人選である。執筆の内容が、論点の東大系派（邪馬台国・卑弥呼は北部九州とする説）の通りであるか否か。以下、長い核心部をが引用する。

一 倭国連合と邪馬台国

卑弥呼の共立

：弥生時代後期、二世紀末から三世紀初頭にかけての倭国は、大きな戦乱が続いた時代を迎えたが、これらの戦いの過程のなから、北部九州、出雲、畿内、東海といった列島各地により広域なクニをまとめた連合体が成立してきた。：そのなかで、「三国志」魏書の：いわゆる「魏志倭人伝」に描かれている邪馬台国を盟主とした倭国連合の政治や社会にふれたい。

まず、倭国連合の成立について述べよう。「魏志倭人伝」は、「倭国大乱」の後のこととして、：卑弥呼という女性が倭国連合の王に共立されたと語っている。それまでは現在の福岡県の北部にあった伊都国の王が、倭国連合の盟主の座に就いていたものと思われるが、「倭国大乱」という状況のなか、従来の男王制では混乱の收拾が出来なくなり、そのかわりとして聖俗の役割分担が明瞭な「女王―男弟」制が登場したのである。

なお、邪馬台国というのは、中国の三国のうちの魏王朝と外交関係をもった、おおよそ「三十国」からなる連合体の盟主として中国史料に残されている一つの「国」にすぎず、邪馬台国が日本列島における最有力の、まして唯一の権力であったと言い切れるかどうかは、慎重に考えるべきである。たとえば、魏に朝貢したのが北部九州の倭国連合で、のちに述べるようにその頃には畿内に倭王権はすでに成立しており、そちらは呉に朝貢していた可能性がある。

倭国連合の政治組織

：邪馬台国を盟主とする倭国連合の政治組織としては、まず伊都国に注目したい。伊都国は、卑弥呼の共立以後も邪馬台国以外ではただ一国だけ王を頂くことを認めていた。そして、伊都国におかれていた一大率は、：一つの政治単位単位である。「倭国大乱」以前に連合体の盟主の地位にあった伊都国が、諸国の検察を行うという軍事的優位性を保持していたということは、邪馬台国連合成立の経緯を考えるうえで重要である。また、伊都国は、「(帯方) 郡使の往来常に駐まる所なり」と記されているなど、帯方郡との交渉を担当していたのであり、伊都国を通じて威信財が分与されていた可能性もある。つまり

邪馬台国とを盟主とする倭国連合は、伊都国が俗権力を代表し、邪馬台国が聖権力を代表する形で成立したと考えられるのである。

また、各国におかれた地位として官（または大官）と副に注目してみよう。官というのは、もとはそれぞれのクニの首長であったものが、連合体の成立に際して、その地位を認定されたものと思われる。クニごとにその名称が異なっている。倭国連合というものが、クニごとの政治的な主体性を残したうえで、卑弥呼を共立することによって成立した、緩やかな政治連合であったことを示している。

副としては、四つのクニにおいて、共通して卑奴母離（ひなもり）という地位がおかれている。：辺地を守るという意味であるが、各クニに共通して同じ名で見えることから、邪馬台国（あるいは伊都国）から派遣された、一種の軍事的な地方官であった可能性も存在する。

倭国連合の外交

ここで当時の国際情勢に目を向けてみよう。当時、中国では魏・蜀・呉の三国が対峙していたが、河北の魏が

遼東地方の半独立政権であった公孫氏を滅ぼして朝鮮半島の帯方郡を接収するや、卑弥呼を盟主とする倭国は、すぐさま魏との外交関係を築いた。：新しい東アジア情勢に対応したものである。

まず、二二九年（魏の景初三年）六月、卑弥呼は使者を洛陽に送り、明帝から「親魏倭王」に冊封され、金印紫綬を授けられた。翌二四〇（正始元）年、魏は倭に使いを遣わして詔書・印綬を拝仮し、鏡など下賜した。その後、二四三にも倭王は魏に遣使し、二四五年には魏は黄幢（こうどう）を倭に仮授している。さらに二四七年には、卑弥呼は狗奴国との交戦を魏に伝えたが、魏は軍事司令官を遣わし、詔書・横幢・激を倭に仮授している。

卑弥呼としては鉄製の武器や生産用具、鏡や剣といった威信財が国内では生産できない当時にあつては、それらを魏から入手して連合体内のクニに分与したり、冊封を受けて倭国王と認められたり、檄文を下賜されたりすることが、連合体の盟主としての地位を維持し、敵対する狗奴国との交戦を有利に進めるために必要だったわけである。

このように魏が倭国を優遇した背景としては、呉の海

上支配に対抗するためとの指摘がある。公孫氏滅亡後、呉と倭王権が直接外交関係を持った可能性があり、魏としては狗奴国の背後に呉を見ていたことになる。なお、この時に卑弥呼が魏から封じられた「親魏倭王」という称号、かつての「倭の奴国の王」と異なり、倭国全体の王であることを認められたことを意味している。

二 纏向遺跡と前方後円墳の成立

纏向遺跡と前方後円墳

大和盆地南東部の三輪山の山麓、三世紀より以前には何もなかった無人の地に、全く新しく政治的に出現した纏向（まきむく）遺跡は、全国各地から搬入された土器からもわかるように、全国的な性格をもつ、初期倭王権の王宮であったと考えられる。

纏向遺跡の特徴は、第一に直径一・五キロから二キロという非常に大きな遺跡で、三世紀になってはじめて造営され、約一〇〇年間経営されて消えていくといふこと、第二にこの遺跡が出現すると、日本列島の物流がこの遺跡を中心に始まるということ、第三にもつとも古い前方後円墳がこの遺跡のなかにつくられていること、第四に

「日本書紀」にみえる倭王権の古い宮都の伝承をもっていふということである。

この纏向の地に初期倭王権の最初の王宮が地理的な意味は、西に対して初瀬川↓大和川をくだると大阪湾に出て、瀬戸内をへて朝鮮半島や中国へのルートが開けるといふこと、東に対しては伊勢に出る交通の要として、東国支配に有利であったことに求められよう。

三世紀初頭に出現した纏向の集落遺跡は、石塚古墳・勝山古墳・矢塚古墳・ホケノ山古墳など纏向型前方後円墳をとめないなが、四つの建物が東西の中心軸を境に南北に均等に振り分けられるという「宮殿居館」を出現させた。発瀬川と遺跡の中心部、そして箸墓古墳を結ぶ幅が六メートルから八メートルもある大運河がつくられるのも特徴的である。そして三世紀後半、大規模遺跡の出現とともに、のちにふれる箸墓古墳を造営し、居館は山手に移築される。四世紀になると、突如として纏向から生活の痕跡がなくなる。

纏向はまったく政治的な集落、というより、王宮と称すべき遺跡なのである。弥生時代の環濠集落が周囲を防御施設で守られた集落であったのに対し、纏向遺跡は運

河で全国各地や朝鮮・中国に対しても開かれた、全く新しい性格を持つ王宮なのであった。

倭王権の成立と軌を一つにして築造された前方後円墳は、近年の考古学の成果によれば、三世紀中葉に出現し、三世紀後半に最初の巨大前方後円墳として箸墓古墳（二八〇メートル程度）が築造されたとされる。その後、四世紀中頃にかけて、ヤマトの地には、西殿塚古墳（二三四メートル）↓桜井茶臼山古墳（二〇七メートル）↓メスリ山古墳（二二四メートル）↓行燈山古墳（二四二メートル）↓渋向山古墳（三〇〇メートル）と一連の巨大前方後円墳が造営される。これらは初期倭王権の盟主墳と考えられる。

前方後円墳は、近藤義郎氏によると、ろその成立当初から、前方部がかなり発達して大きく高くなっている。前方後円形という墳丘、堅穴式石室のなかに割竹形木棺を入れるという埋葬施設、鏡・鉄製武器・玉類を大量に副葬するという副葬品——弥生時代の段階では北部九州にのみみられ、近畿地方では見られなかった風習である——葺石（ふきいし）・埴輪という外表施設などに強い画一性あるいは統一性を有していた。

それらの諸特徴は、吉備・山陰・播磨・北部九州・近畿などの諸地域の弥生墳丘墓の特徴を統合したものであり、この葬制が各地に波及したことは、地域首長と大和連合とが祖霊の世界を共通にする擬制的同祖同族関係に入ったことを示すものであった。近藤氏は、前方後円墳の成立の背後に、大和連合を盟主とする畿内および周辺諸部族、瀬戸内海沿岸諸部族、北東九州および山陰の諸部族の政治的・祭祀的結集の形成を想定している。

倭王権の成立

この政治的・祭祀的結集こそ、倭王権の成立と考えるべきであろう。とくに箸墓古墳と相似形で規模を二分の一などに縮小した出現期古墳が全国に存在することは、倭王権の盟主と地方豪族のあいだに政治連合的關係が結ばれ、同祖同族意識を共有するにいたったことを強く示唆するものである。

ただし、これはあくまで考古学的な成果から導き出された結果であって、これを短絡的に記紀の伝える「大和朝廷」と地方勢力との戦いの結果と結びつけたり、初期倭王権の盟主墳と記紀の伝える「天皇」と結びつけたりするのは、全く意味のないことである。万世一系の天皇

系譜というのは、全く形成されていなかったのみならず、倭王権の盟主を示す血縁集団すら、六世紀まで固定されてはいなかったのである。

初期倭王権の段階では、盟主も大和盆地の各集団から持ち回りで出していたはずであるし、地方豪族との関係も、ゆるやかな政治同盟と考えたほうがいいであろう。

三 邪馬台国連合の終焉と倭王権の成立

邪馬台国を盟主とする倭国連合の終焉と倭王権の成立の年代の問題にふれておきたい。「魏志倭人伝」によると卑弥呼の死後、俗王としての男王を立てると、大乱が再び起こった。そしてふたたび聖王として卑弥呼の宗女である十三歳の耆与（もしくは台与）を女王に立てると、国中が定まったとある。

耆与（台与）は魏に遣使したとみえるが、それは西暦二五〇年前後のことであつたと思われる。また、二六五年に魏が滅ぶと、新たに建国した晋に、二六六年に「倭人」が遣使して貢物を献上している（晋書・武帝記）。

この二六六年の「倭人」も耆与であつた可能性もまっ

たくく考えられないわけではないが、この「倭」は、邪馬台国を盟主とする倭国連合か、はたまた大和盆地に成立した倭王権かは不明といわざるをえない。三世紀後半には、さに述べた纏向遺跡と前方後円墳に象徴される倭王権が、すでに成立しているからである、

ただこの事実をもつて、倭国連合から倭王権へと中央権力が直接継承された、あるいは邪馬台国がすなわち倭王権であつたと考える必要は、まったくないものと考えたい。むしろ、別個の権力連合として、三世紀後半には北部九州の倭国連合と大和盆地の倭王権が併存しており、もつとあとの時代に、倭王権がより大きな政治権力となつたと考えるべはないかと考えている。

そもそも、纏向遺跡が邪馬台国だとすると、この偉大遺跡が三世紀になつて突然出現したことの意味が解けない。それまで卑弥呼たちは唐古・鍵遺跡（奈良県田原本町）にでも居住し、集団で纏向に移住したとでも説明するつもりなのであろうか。また、前方後円墳に副葬された品々が鏡・剣・玉という、北部九州に特有のものであつたことは、前方後円墳という葬制が成立した際に、畿内とのあいだに政治的な同盟関係が形成されたことを強く示唆している。

「魏志倭人伝」に記された帯方郡から邪馬台国までの里程にあまり意味がないことはさきに述べたが、それでもこの里程記事を素直に読む限りでは、「水行十日、陸行一月」というのを帯方郡から邪馬台国までの「万二千里」という距離から、帯方郡から伊都国までの距離を引き算すれば、邪馬台国は伊都国の南千数百里になる。他の国同士の距離を考えると、これはせいぜい数十キロ程度、筑紫平野南部のどこかに落ち着くのである。

先にも述べたが、三国のうちで魏に朝貢したのが北部九州の倭国連合で、その頃には畿内には保王権が成立しており、そちらは呉のほうに朝貢していたと考えても何ら差し支えはないのである。呉には「三国志」では本紀も夷狄列伝も作られていない。呉の外交記録は散逸ししまったと考えるべきである。

呉と倭の交流は、山梨県の鳥居原狐塚古墳、兵庫県の安倉高塚古墳、京都の上狛古墳など、呉の年号を刻された銘文をもつ神獸鏡が出土していることから明らかにある。中国の古地図では、十四世紀に元図ができた「広輪疆里図」や「広輿図」をはじめ、明の時代くらいまでは、「日本国」と「倭」は別の島として描かれている。

大和盆地で大きな遺跡が発見されるとすぐ邪馬台国と結びつけたり、大きな古墳があるとすぐに卑弥呼や耆与の墳墓だと考えて大騒ぎするのはいやしくも研究レベルでは避けるべき態度であろう。

そもそも、日本列島各地の多様な政治勢力の存在を認めずに、邪馬台国連合が日本列島の最有力な、まして唯一の政治権力と考えたり、それが「ヤマト政権」そのものであって、のちの天皇家につながる政治権力であると主張したりする発想にこそ、恐ろしい意図が隠されているのではないかと、勘ぐりたくなるというものである。

ここで引用した最後のフレーズ（注・太字）に東大派（卑弥呼の邪馬台国は北部九州、邪馬台国連合とヤマト政権は別の政治権力）の主張・学説が集約されている。

放送大学の講座テキストと同じとすれば、かなり挑発的なフレーズが出てくる。明らかに、京都学派の、邪馬台国は大和説、卑弥呼・耆与の邪馬台国は、のちの大王・天皇家の祖先に連なる、との学説に對抗している。続きは、次の第二章の「古代史の論争」：東大と京大の学派、でさらに深化したい（大野）。